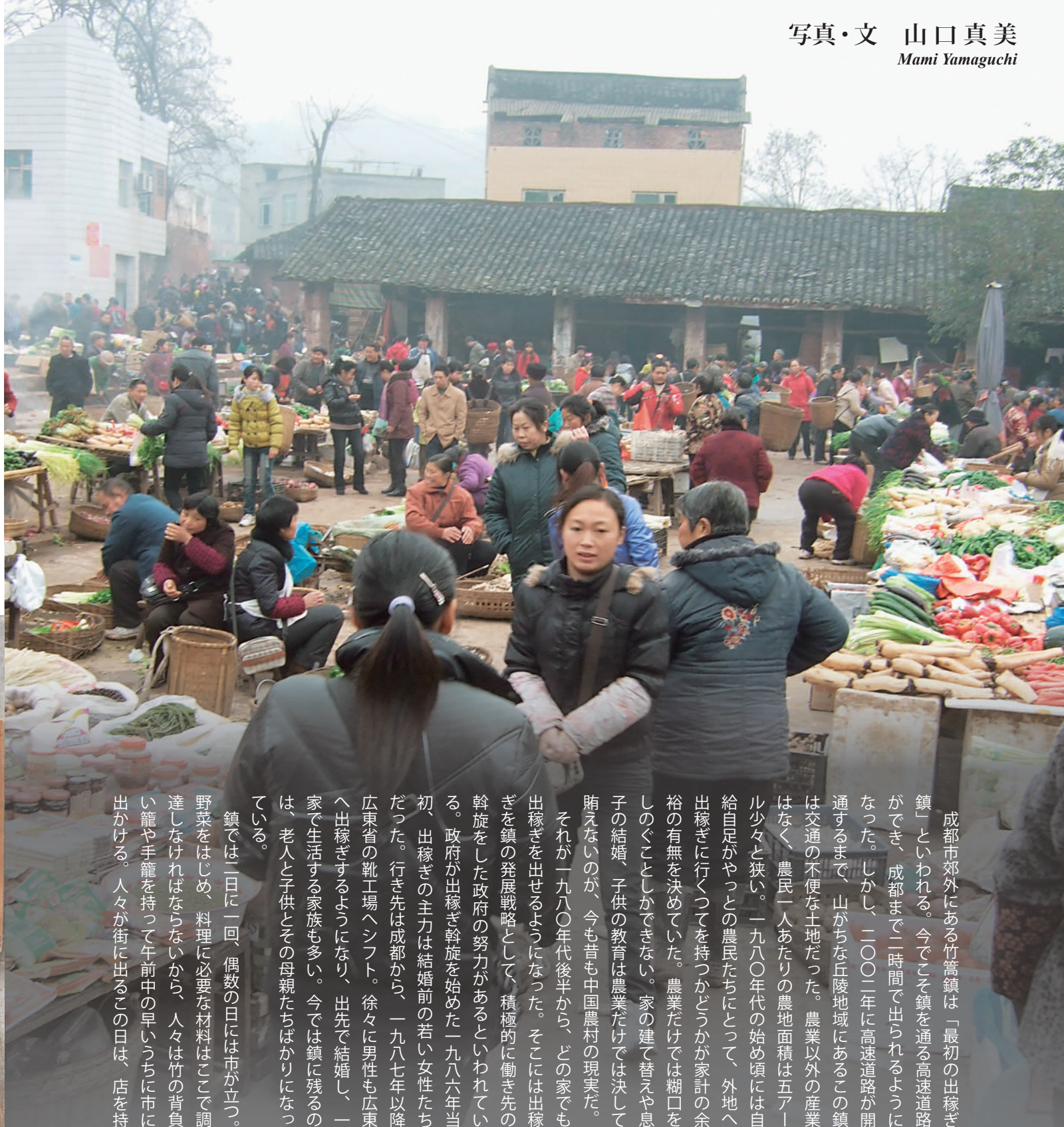


中国四川の出稼ぎの里

変わらない風景 新しい風景

写真・文 山口真美
Mami Yamaguchi



成都市郊外にある竹篙鎮は「最初の出稼ぎ鎮」といわれる。今でこそ鎮を通る高速道路ができ、成都まで二時間で出られるようになった。しかし、二〇〇二年に高速道路が開通するまで、山がちな丘陵地域にあるこの鎮は交通の不便な土地だった。農業以外の産業はなく、農民一人あたりの農地面積は五アール少々と狭い。一九八〇年代の始め頃には自給自足がやつの農民たちにとって、外地へ出稼ぎに行くつてを持つかが家計の余裕の有無を決めていた。農業だけでは糊口をしのぐことができな。家の建て替えや息子の結婚、子供の教育は農業だけでは決して賄えないのが、今も昔も中国農村の現実だ。それが一九八〇年代後半から、どの家でも出稼ぎを出せるようになった。そこには出稼ぎを鎮の発展戦略として、積極的に働き先の斡旋をした政府の努力があるといわれている。政府が出稼ぎ斡旋を始めた一九八六年当初、出稼ぎの主力は結婚前の若い女性たちだった。行き先は成都から、一九八七年以降広東省の靴工場へシフト。徐々に男性も広東へ出稼ぎするようになり、出先で結婚し、一家で生活する家族も多い。今では鎮に残るのは、老人と子供とその母親たちばかりになっている。

鎮では二日に一回、偶数の日には市が立つ。野菜をはじめ、料理に必要な材料はここで調達しなければならぬから、人々は竹の背負い籠や手籠を持って午前中の早いうちに市に出かける。人々が街に出るこの日は、店を持

たない小さな物売りやサービス業者のかき入れ時でもある。手製のほうきを売るおじさん、ナツメの水飴かけを売り歩く老夫婦、路地端で小麦を揚げたおやつを売る女性、路地の奥まったところには、年季の入った道具を売った床屋さん。これらの小さな行人や物売り、職人たちは皆、市の立つ日だけ商売をする農民だ。儲けも小さいかわりに、元手もいらさない。

鎮の総合市場はただ一つで、大きなメイン会場には野菜、肉、水産品、乾物と区切られたスペースに商品が並ぶ。ここでの販売スペースを借りるには、一日一〇元（約一三〇円）ほどの場所代を市場管理者に払わなければならない。しかし、メイン会場へと続く道の路上でも農民が、自作の野菜を並べている。種類は限られるがこちらは無料経営、その分価格も安い。出稼ぎの里の日常風景は十年一日の如く静かで、変わらない。

鎮内に二〇〇〇年代後半になって現れた新しい風景が、有名ブランドの家電製品や携帯電話の専売店、そして中小の縫製工場だ。新しく整備された「帰郷起業ストリート」という街区にはハイアールの専売店、中国移动の携帯電話販売店の支店をはじめ、ブランド名を冠した宝石店、女性用下着店などが軒を連ねている。有名ブランドの専売店や支店になるためには年間数万元の経営権を支払わなければならない、農民はとてども手が届かない。経営者は沿海部へ



市の立つ日の鎮の目抜き通り



▲道ばたの農民野菜売り。総合市場の前の道にて



▲物売りをする老夫婦。手前のおじさんが持つのは棗（ナツメ）の水飴かけ

▼路地端で小麦を揚げた小吃（おやつ）を売る女性。老若男女に人気



路地の床屋さん。傍らの練炭で湯を沸かし、洗髪もしてくれる



▲「帰郷起業ストリート」にある海尔（ハイアール）専門店。2階以上は都市部と同じような商品住宅

▼鎮政府のスローガン：「労働力を送り出し、生産力を持ち帰ろう。出稼ぎ者を送り出し、起業家を呼び戻そう」



▲縫製工場内部。数人一組のライン作業は広東と同じで皆熟練している



▲日曜日の工場では、作業場内に子供がちらほら。小さい子供の子守りをする小学生の女の子



▲帰郷起業家。広東への初代出稼ぎ女性

の出稼ぎで稼いできた「帰郷起業家」ばかりである。出稼ぎ帰りの起業家による工場の操業も相次いでいる。起業家は一九八〇年代から九〇年代に広東の靴工場や衣料品工場に出稼ぎに行き、縫製技能を身につけた地元出身者が多い。そこで働くワーカーもまた、広東の靴工場や衣料品工場で長年働き、帰郷した地元の女性たちばかりだ。中国では、子供が小さいうちは故郷の親に子供を預け、夫婦で出稼ぎする家庭が非常に多い。ただし、その弊害も多く、祖父母に甘やかされて子供のしつけが行き届かない、成績が悪くなる、精神的に不安定になるなどの深刻な影響が出てきているという。広東での出稼ぎを切り上げ、鎮の工場働く女性たちの帰郷のきっかけも、子供の小中学校就学や親の病気などであった。日曜日に訪れた工場では、働くワーカーの身辺には小さな子供が遊ぶ姿があちこちに見られた。就業中は大きな子供が小さな子供をおぶったり、面倒をみたりして長い一日を過ごす



▲学校帰りの子供たちは、柵の外で親の終業を待つ



▲広東の台湾式経営スタイルを採用した靴工場。操業時間中は柵が閉じられている



▲春節明け、東莞への直通バス。男性たちは再び沿海へ



▲母親のオートバイの後ろに乗って、一斉に帰宅

す。鎮の工場は出来高制のため、子供が作業場に入出入りすることには寛容のようだった。平日、学校へ通う子供は下校後、工場前まで帰って親の終業を待ち、親と一緒に帰宅するのが日課になっている。

かつて、はるばる広東まで出稼ぎするしかなかった地元の人々が、地元で働けるようになった。そのこと自体は朗報に違いない。ただし今のところ、鎮内の工場で働くワーカーの大半が女性たちであり、子供の世話などのため、やむを得ず帰郷した者ばかりだ。出稼ぎ先の都市で一家がそろって生活するコストは、一般的な出稼ぎ家庭にはやはり高い。一方、彼女たちの夫たちはまだ、広東や成都で出稼ぎ中だという。鎮内の工場の賃金は沿海部や成都の同職種より数百元低く、就業時間も長い。休日も月に一―二日のみの工場が多い。自宅が近く、毎日通える者ばかりでなく、工場の無料宿舎に泊まるワーカーは一週間に一度帰宅できるかどうかだ。家族を養うための出稼ぎは場所を変えて、担い手を変えて、今も続いている。

